

運命の赤い瞳 Special Edition II

彷徨える魂

CONTENTS

PROLOGUE.....	3
亡霊の少年.....	8
楽園の侵入者.....	93
無縁の地へ.....	133
アンチェインド・メロデー.....	155
紫紺と白銀.....	185
EPILOGUE 不滅の剣.....	232

登場人物紹介

東風谷早苗

守矢神社の風祝を営む、現人神の少女。幻想郷に迷い込んだシンと地霊殿での一件以降親しくなる。コズミック・イラ帰還の方法を探る一方で、シンと共に妖怪退治を生業としている。

シン・アスカ

“デスティニー”と共に幻想郷に迷い込んだ少年。元の世界へ帰るため幻想郷を奔走するが、その最中“デスティニー”を大破させてしまい、にとりが建造した“デスティニーインパルス R”に搭乗する事に。普段はにとりの作業場か、守矢神社で日々を過ごしている。

霍青娥

妖しい笑みが特徴的な女性。邪仙と呼ばれる存在であり、幻想郷の至る所で謎の多い行動を取るが、その真意は不明。幻想郷に迷い込んだ謎の少年を引き取り、白玉楼に預ける。

レイ

記憶喪失の少年。幻想郷の辺境の地で倒れていた所を青娥に助けられた。青娥の趣味で宮廷衣装を身に纏っている。薄れ行く影のような印象から、『亡霊のよう』と連想した幽々子からレイと名付けられた。

西行寺幽々子

冥界に存在する楼閣、白玉楼に住む亡霊の姫であり住み込みの庭師である魂魄妖夢の預かり人。青娥からの頼みでレイを白玉楼で預かる事に。レイに対し何かしらの不安を抱いているようだが……

魂魄妖夢

白玉楼に住む剣術指南師兼庭師の少女。行方不明の祖父の言葉に従い、幽々子に剣術を教えることを日課としている。半人半霊であり、長命を持つ。幽々子と同じく剣術を教わることになったレイを気にかける。

PROLOGUE

生物は火を恐れた。

触れれば害になり、広がれば棲家を脅かし、死をもたらす災厄の象徴。

暗闇の洞穴で過ごしていた頃のヒトは他の獣や植物のように、火に対して抗うすべを持たなかった。

しかし時はヒトに知識を授けた。ヒトは自らの力で火を生み出し、操り、自らの力に換えて、文明を創り上げるものとなった。

地球上で最強とされる生物、それがヒト。ホモ・サピエンス。自らの種に人間と名付けたヒトは、数多の生物を淘汰し地球上の頂点に君臨した。そして彼らは闘争本能の代わりに知恵を使い、高度な文明を発展させ、火を、電気を、水を操る力を得た。

だが人間は知性を得たとはいえ、自らに眠る闘争本能をいつまでも抑えられない。得た力を同胞にぶつけないという選択を選ぶことはできなかった。

ヒトはヒト相手に争いを繰り返し、数多の屍を築き上げながら殺し合った。そして、人々は火の力を以って、銃を創り出した。

便利な武器で効率的に人を殺せることが証明されると、更に人間はより大量に人を殺せる武器を欲した。

その果てに、ヒトはモビルスーツという機械の人形を創り出した。コズミック・イラと年号を定めた、ある世界での出来事だった。

そして究極のモビルスーツとして、G兵器と呼ばれる試作機動兵器を生み出してしまった。G兵器の技術はある時を境にコズミック・イラ全ての世界に渡り、二度の大戦を産んだ。

その醜い争いは、英雄と称される者たちの手によって終止符を打たれた。しかし大戦の果てに待ち受けていたのは、混沌という名の傷痕だ。

誰もが自らの自由、正義、運命を見つけるために、世界の至る所で内戦と紛争が勃発した。浸透してしまったモビルスーツの技術で大勢の人が毎日毎秒毎に死んでゆく、悪夢を体現したかのような世界へ変わってしまった。

このまま人類は、自らが育てた力に吞まれて、滅ぶしか無いのか？

それを決して認めない、少年がいた。

戦争という名の災禍……人によって家族を奪われ、独りとなった少年。

シン・アスカ。彼は「幻想郷」と呼ばれる世界に迷い込んでも尚、自らの信念のために戦い続けていた。

元の世界に帰り、自らのような子供を生み出さないために。

「「いっけええええ！」」

東風谷早苗は空中で一心不乱に叫んだ。

朱く染まった、幻想郷の空に、幻想郷に迷い込んだガンダム——デステイニーガンダム^グのストラスター音がこだまする。

隣では封獣ぬえと名乗った鶴妖怪の少女と、自分と同じ妖怪退治を営む巫女の少女、博麗霊夢の姿もある。

墜ちゆく巨大な影、聖輦船^グを早苗たちは、デステイニー^グと共に空で支えていた。聖輦船の内部で循環していた法力が限界を迎え、浮力を失って墜落しようとしているからだ。

聖輦船は、幻想郷^グの人里に向けて徐々に高度を落としつつあった。このままでは多くの人々の命が失われるのは明白だ。

「デステイニー^グ」一機でも止まらない質量の暴力に対し、少しでも力になろうと早苗は両腕を船体に当てた。聖輦船^グの乗組員達と共に。

目の前で、誰かの命を失わせる訳にはいかない。早苗達は同じ想いのシンと共に聖輦船の墜落を阻止しようと全力を出す。

ぬえも早苗と同じように聖輦船を止めようとしてくれている。里へと墜ちる聖輦船の軌道を変えようと、船の側面には多々良小傘、博麗霊夢、霧雨魔理沙の姿もある。この聖輦船にまで共に付いてきてくれた、早苗の仲間たちだ。

しかし、デステイニー^グに比べれば靈力飛翔による押し出しなど微々たるものだった。

落下は止められない。眼下に見える緑が鮮明になることに本能的に恐怖を抱いた時、
「デステイニー」から少年の声が響いた。シンだ。

「みんな下がれッ！」「デステイニー」の残る全ての武器を使って、聖輦船の一部を削り取るッ！ そうすれば——

「だめよ！ 落下しながらの攻撃なんて！ 捨て身のつもり？！」

「シン、あんた……！」

靈夢と、そしてぬえがそれを聞いて目を見開いた。今のデステイニーは満身創痍だ。

雲山という名の入道雲妖怪から受けた機体の損壊、聖輦船の妖怪たちが助けようとした人物、聖白蓮の為に無理矢理突破した法界の靈力障壁に対する負担。そして今の聖輦船を押し上げようとして機体のフレームに過負荷がかかっている状態。

そんな状態で「デステイニー」の武装を使えば、どうなるかわからない。聖輦船の大きさは「デステイニー」の数十倍に当たるため、容易な破壊もまた不可能だろう。

「ダメ、シン！ 貴方はまさか……！」

早苗のその叫びが届くことはなかった。シンが鬼気迫る声で返答を待たずに「離れろ」と叫んだからだ。直後、「デステイニー」の全身に備えた推進口から閃光が散った。

「デステイニー」の全力飛行の傍に留まることは、人間だろうと妖怪だろうと生身ではできない。吐き出される高温の推進剤は極めて危険だ。

早苗も他の人妖達も、シンの叫びに従って船体から離れる。

「シイインシンン！」

「バカ！ よせ、早苗ッ！」

「とどまりなさい、早苗！ シンの言葉がわからないの！」

早苗だけ、*デステイニー*に付き添おうとした。

しかし、魔理沙と霊夢が羽交い締めにして無理矢理抑えてきた。早苗は落ちてゆく聖輦船とそれを支える *デステイニー* に手を伸ばす。

唯一できたのは、その勇姿が地上へと小さくなってゆくのを見つめる事だけだった。

やがて轟音とともに土埃が地面に巻き上がる。早苗と、早苗とともに聖輦船を止めようとしたぬえや霊夢たちも空中からその様子を眺めている。星蓮船は、人里に墜ちてはいない。

里の離れに存在する墓地群の近くにその巨体は攔座し、半球状の墜落跡を数百メートルほど地面に刻んだ後。大きな、とても大きな空飛ぶ船はようやくやくして止まった。

「シン……」

*幻想郷*の春先。*幻想郷*の歴史を示す書物、*幻想郷縁起*にて、後に聖輦船異変と記される異変の結末は、人妖の少女たちと一機の機動戦士によって終わりを迎えたのであった。

亡霊の少年

「各システム正常。河童たちの退避も異常なし。いつでも出せるぞ、シン」

妖怪の山のふもとに存在する、巨大な河原の平瀬の辺りに建てられた作業場。その中で幼さを残した少女の言葉が広がった。

作業場の主、河城にとりは目の前にそびえる灰色の巨大建造物を見上げながら、広い室内の中で声を通るよう、叫ぶ一步直前の声量を吐き出していった。

部屋を中心にて、折りたたまれたキャットウォークに囲まれている鋼鉄の人型。にとりはその中に乗り込んでいる少年に呼び掛けている。

「了解。こつちも各パーツ、ステータスに異常はない。予定通りテストをやるぞ。……みんな、外の様子は？」

鋼鉄の巨人の腹部、モビルスーツのコックピットから少年、シン・アスカがそう答える。

「こちら早苗。作業場上空の北は問題なし。シン、近くに誰かが通りすがってる様子はありますか……小傘さん、ぬえさん、そちらは？」

「東の見張りの小傘、問題ないよ！ ま、お腹いっぱいなのいまの私なら、たとえ何が来ても驚かして、追い払えるくらい余裕もあるしね」

「西監視担当、ぬえよ。同じく邪魔者はいないみたいね。ちょっと前に物好きそうな妖怪がい

たけど、適当にあしらっておいたわ

「はいはい！ 南側の射命丸です！ こっちもフレームインしそうな妖怪がいたので吹き飛ばしておきました！ ついでにガンダムの撮影準備も完了していますッ！ 文々。新聞の一面記事にバッチシ載せちゃいますから、華麗な御姿を存分に見せてくださいよ！」

にとりが手にしている通信端末から外の上空に出ている四人の声が帰ってきた。シンもまたコックピットに載せられている通信機から聞こえているだろう。

シンが持ち合わせていたザフト軍制式仕様の通信機器。それをにとりたち河童が模倣し、複製を早苗たちに渡しているのだ。初めての運用だが、問題もないらしくにとりは安堵する。

——いよいよ、か。

にとりは、シンが今乗り込んでいるモビルスーツとは別に、作業場の壁近くに安置している傷ついた翼、*「デステイニー」*を一瞥した。モビルスーツ・*「デステイニーガンダム」*は、痛ましい姿を薄闇の中で示している。

遅しいアスリートのような洗練されたボディは、装甲を大きく扶られ、内部の機器に無数のショート痕を残している。物理的損傷をほとんど無効化出来るフェイズシフト装甲と信頼性の高いショックアブソーバーのおかげでパイロットのシンは無事だった。が、大質量の過負荷が全身に渡った結果、四肢の全てが例外なく無残な状態に置かれていた。両腕に至っては着地の際からあらぬ方向に曲がってさえいる。人間で例えるならば全身複雑骨折にあたるのだろうか。

聖輦船事件よりも前、必死の思いで動力源を取り戻したばかりだと言うのに。シン・アスカの剣は再び傷つき、眠りの中にいる。

これでは、彼が元の世界に戻るなど出来はしない。

にとりはそう思い、*デステイニー*の*アビオニクス*に組み込まれたOS、『G・U・N・D・A・M』内に蓄積されていたデータベースから、ある機体のデータを取り出し、仲間の河童たちとともにその復元作業に取り掛かった。

そして今日、その機体を組み立て終えての初飛行となる。目の前の機体は、*デステイニー*と似通ったフォルムを持ちながら細部が大きく異なる姿を持っていた。元となる機体が*デステイニー*より前の世代に当たる試作機であった故、*デステイニー*に比べればまだ洗練されていない技術が現れている。

各所の装甲は空気抵抗等に対する対処が行き届いておらず、角ばっていた。*デステイニー*から移植したウィングワインダーは、破損した高エネルギー長射程ビーム砲とビームソード、*アロンダイト*を取り外し、新たに二門のテレスコピック構造のビーム砲塔が代わりに装備されている。翼に隠れるようにそのガンダムの腰部には、新たに製造したビームライフルが装備されている。新造した装備は、可能な限りデータを忠実に再現したものだ。正確には、模倣以外で作れないほどの高等技術の塊であるため、河童の独自技術でモビルスーツの兵装を用意できない結果なのだ。

その機体の名は、インパルス。

本来、デステイニーの従来機に当たるそのガンダムは、シンの操縦によって作業場の外にまで歩行していく。動作に問題はないようだ。

場所を作業場から外に移した鉄の巨人は、背部の翼を広げた。

翼——インパルスの背部に取り付けられた光圧推進ウイングユニット、正式名称をデステイニーRシルエットと名付けられた装備には多くの兵装が搭載されていた。光圧推進から生まれる『光の翼』もそのうちのひとつだ。ヴォワチュール・リュミエールの改良スラスターと、コロイドの粒子の高濃度散布により、戦闘機動中はあたかも分身しているようにみえる攪乱用の装備だ。

本来、飛行テストにはこれほどまでの武装は必要ない。モックアップで重量に限って再現すればいいからだ。しかしにとり以外の河童たちが趣味で兵装まで作り上げてしまった為に、ほぼ実戦仕様の機体となってしまうていた。最も、これより詳細なテストデータは獲得できる。

しかし、本来この幻想郷で必要ない武器を持つインパルスに対し、にとりは若干複雑な思いを抱いていた。その武器は自衛のために持たせているのだが、万が一使われる事態になれば、シンは躊躇いなくガンダムの『力』を振るう筈。

その時、シンの目の前に立ちふさがるのは一体何なのだろうか？

——いけない、ボーツとしてちゃ。

今はその雑念を振り払う。目の前に集中しなくては。大丈夫、これまでのパーツ間の導通テスト、動作テストに問題はない。無事に飛べると、にとりは確信していた。

自分は、幻想郷の一のエンジンニア。自分の手がけた物が無様な姿を晒すことはない。

霊力を持たず、翼を持たない人間を空に飛ばすことぐらい造作も無いのだから——！

「よし……飛べ！ ガンダムツ！！」

にとりは手元の機械に手を伸ばしてボタンを押した。作業場のブザーボタンだ。本来は騒音の中で河童たちを呼び出したりするためのものだが、それを発進合図代わりにした。

〈シン・アスカ！ ッステイニーインパルス^{リジネス} R、行きますッ！！〉

インパルスの瞳に当たるデュアルセンサーが発光した。機体内の出力が一気に上がった事を示しているのだ。

彼の勇姿を思い起こさせる高らかな宣言が作業場に鳴り響き、同時に機体各部のスラスタから、充填されたばかりの推進剤の眩い閃光が輝き出す。一瞬ふわりと河原の地面からインパルスが浮き上がったかと思えば、瞬く間に鋼鉄の体は青空の中へと姿を移していた。鉄灰色だった装甲に色が灯りだす。ヴァリアブル^Vフェイズ^Fシフト^S装甲が相転移反応を起こし、アクティブモードへと移行したのだ。

その主色は紫紺。草花の毒を連想させるその色は、ッステイニーの動力源であるハイパーデュートリオンエンジンを移植され、機体構造が全く異なるフレームを持つッステイニー

インパルスに合わせたフェイズシフトの電圧設定による影響だ。

「わあ……！ アレが、私たちの世界で創り上げた……ガンダム……！！」

その巨軀が地面を離れていく姿に、通信機越しに早苗たちの沸き立つ声が耳に届く。

にとりも通信機を持ち出して作業場の外に飛び出し、霊力飛翔で空中からインパルスの姿を見守る。

そしてインパルスは空中で予めとりに伝えていた試験用のマニュアルを披露していく。急加速、急制動。バレルロール、宙返り等々……時には装備されたライフルや背部ビーム砲、ウルフスベインの稼働テストとして照準用のレーザーの照射を行っていた。シンの手によってインパルスからのテストデータがとりの端末に次々と送り込まれる。

問題ない。テストは成功だ。にとりは無意識に胸元で拳を握りしめていた。そして、飛翔の霊力を緩めて、作業場の屋根へと身体を下ろした。

そこからとりは、河原近くの森の上空でテストを続けていく。インパルスを見つめながら、そのコックピットの中にいる黒髪の少年の顔を思い浮かべる。

この世界、幻想郷とは違う世界。

年号をコズミック・イラと定めた別の世界から迷い込んできた少年シン・アスカ。

彼がにとりの作業場に落ちてきて、半年が経過してしまった。

彼は元の世界に戻るためにこの世界でガンダムに乗り続け、時にはその力を用いて、幻想郷

◇の中で巻き起こる異変を、早苗や霊夢と共にこれまでに解決してきた。

しかしそれまでの過程で、未だ彼が元の世界に帰る事のできる手がかりは掴めていなかった。

——本当に、アイツは帰れるんだろうか……? :

にとりは固く口をつぐんだ表情のまま、インパルス◇を眺め続けた。

にとりの顔にあるのは、憂い。

きつと目の前の結果は晴れやかなものであるはずなのに。出口のない迷路に囚われたような気分陥っている。

流星のように墜ちてきた少年に対する心配が。今のにとりの心を覆い尽くしていた。

早苗は霊力飛翔を解いて小傘たちと共ににとりの作業場へと戻ってきた。飛行テストを終え、作業場のそばに着地した。◇インパルス◇もまた地上に降りていく。

コックピットからヘルメットを脱いだシンが現れ、昇降用ラダーで地面に降りた途端、河童たちに群がられた。

「お、おいおい！ よせつて、お前ら！」

真紅のノーマルスーツ——コズミック・イラの世界において、モビルスーツに搭乗するパイロットが着るスーツの事だ——姿のシンは彼女たちの胴上げによって上下に跳ねている。

「あつ！ 私たちもやるやる！ ぬえ！」

「あたりまえでしょ！」

わっしょい、わっしょいと気楽な声が辺りに響いていく。早苗はその様子に微笑ましい気持ちになりながら、シンの新たなモビルスーツ、インパルス^グを正面からじっくりと眺めた。

インパルス^グは跪いた体制を取っている。

——この^グ幻想郷^グにおける、シンの新たな剣。

本来はシンが乗ることもなかった、^グデステイニー^グの開発に繋がる経緯を持つ従来機^グデステイニーインパルス^グに対し、民間企業によって改良を加えられたデータを元に造り上げられた機体が、^グデステイニーインパルス^グだ。

にとりたちは^グデステイニー^グに保存されていたそのデータを元にして、機体を新造してしまったのだ。破損した^グデステイニー^グから可能な限りパーツを流用したとは言え、驚異的な技術力から成せたことだった。

^グデステイニーインパルス^グは本来、新たに組み込まれたバディシステムと呼ばれる装置によって、単体のパイロットで複数のモビルスーツを操ることが出来るモビルスーツだという。

このシン専用調整された^グデステイニーインパルス^グは兵装をそのままに、バディシステム等、シンにとって不要なシステムを全て廃した特別仕様の機体と化している。にとり曰く、言わば^グデステイニーインパルス^グ・^{SS}^{シン仕様}^グとでも名付けるべきものだ。シンが大戦時に搭乘していた^グインパルス^グ試作初号機的设计を反映させており、コックピット、シルエットそれ

それにコックピットがあるのが、本来の『デステイニーインパルスR』と比べて最大の違いだ。「いざという時、この機体でシンは元の世界に……」

早苗とシンは今日まで『幻想郷』に移り住んできた者たちを追って妖怪退治の日々を送り続けていた。

その日々の中で聖輦船異変、神霊異変、宗教戦争異変、逆様異変、都市伝説異変等々と、霊夢たちとともに異変を調査していた。それらの異変で『幻想郷』に移り住んできた者たちにか、シンの世界に帰る方法の手がかりを探せるのではないかと思っただからだ。

しかしながら、結果は芳しくない。

早苗と神奈子が、半年前シンに説明した通り、『シンの世界が文字通り別次元に存在する』のが最大の理由だ。

シンの世界がある次元、『コズミック・イラ次元』は、『幻想郷』や早苗の元の世界、『外の世界』が存在する『西暦次元』と完全に接点のない異世界である。その為、シン以外に『コズミック・イラ次元』から『幻想郷』に転移した人間のケースも確認できていないのもあり、その渡航に対して有効な手段が確立されていないのだ。

これまで『幻想郷』に移り住んできた妖怪たち、そして都市伝説異変で自由に『外の世界』と、『幻想郷』を行き来することが出来る唯一の人間、宇佐見薫子から知識を借りようと試みもしたが、未だに解決の目処が立っていない。この『幻想郷』の巫女である博麗霊夢の協力を

もってしてもだ。

シンが元の世界に帰るのは、元の世界で戦うことで救えるはずの命を救うため。

シンは異変を共に解決していく中、決して絶望せずに帰る手段を模索し続けている。

しかし、早苗はわかっていた。

その笑顔の裏で彼が思い詰めていることを。

元の世界に帰れないという不安が、徐々に色濃くなっていることを。

そう感じることでできる、自分の持つ『女の勲』というものが、案外正確だということを感じてしまった。時折シンの見せる暗い表情を目の当たりにしてしまえば、信じる他にない。

「あなたと私で、シンを助けよ………ね、インパルス」

インパルスは離れた主をいつでも待つかのように跪いている。

早苗はインパルスの足部に触れながら小さくそう呟く。冷たいこの鎧が、この先シンを守ってくれるはず。ただ、願わくは争いのためにこの機体が飛ぶのを見たくはない。この機体は、シンを元の世界に送り出すための船なのだから。

早苗は小傘やぬえに飛びつかれているシンを遠くから見守りつつ、過去、外的世界にいた頃に心を交わした少年、高槻真に瓜二つの彼の笑顔を見つめあげる。

——私は……シンを助きたい。しん君に似ているからなんかない。私のトラウマを拭ってくれたシンを、今度は私が助けてあげる番だから。

この先どんな困難が待っているとも。その誓いは揺るがさない。それが早苗の見出した決意だった。

「あら、眼下に客人」

半人半霊の少女、魂魄妖夢は動かしていた箒の動きを止めてそう言った。

「幻想郷」内の霊界と呼ばれる空間の一角。

そこに存在する白玉楼に住み込みで働いている彼女は、剣術指南役兼庭師であり、今日も朝から着慣れた緑色のジャンパースカート姿に着替えて、白玉楼の玄関にて日課である掃除を行っているところだ。

周りにだれもいないことを確認し、鼻歌でも嗜みながら機嫌よく両手を動かしていたら、白玉楼から伸びている長い階段の中に一つの人影が見えたのだ。邪魔された気分になり、不機嫌を少しだけ顔に出す。

——しかし、こんな朝っぱらから誰が？ もしや、賊？

箒を玄関の壁にかけて小さく息を整える。万が一に備えて肌身離さず持ち歩いている二つの相棒へと視線を移す。背中と腰に収まっている二つの柄尻を確認したところで妖夢はセミロングの銀髪を揺らしながら階段に視線を戻した。

「そのの貴方、止まりなさい。こんな早い時間に、一体何用です？ 用もない人を歓迎するほ

ど、白玉楼は暇ではありませんよ」

冥界特有の葦アシ色の大気の中で、通る声を妖夢は腹から出した。

「……用はありますとも。その屋敷の主さんにね。お通しくださらない？」

次第に鮮明になりつつある相手の姿から、絹糸のような繊細な響きが帰ってきた。妖夢は目を凝らし、相手の姿に注目する。

その女は至る所に豪華なフリルが付いた、青いワンピースを着ていた。華奢な腰には桃の花があしらっている飾りがついたベルトが巻かれ、膝にまで伸びた薄い生地のスカートからは、如何にも女性らしい、細く白い脚が透けて見えた。

クセのあるセミロングの髪にはかんざしらしきものが差し込まれてあり、その前髪の奥にある表情は柔和なもので彩られている。

それらを前にして本能的に妖夢は悟った。目の前の女の笑顔に、どこか薄っすらと陰りが差している。一言で評するならば、怪しい。

女の様子に、何も信用に値する要素が見受けられない。

「……まずはそこで止まりなさい。貴方は幽々子様ユウヤカサマに約束を取り付けた上で来られたのですか？ 来客など私は聞いていません。まずはそこで止まって、私が幽々子様ユウヤカサマに確認を——」

「悪いけど、そんな悠長な時間も計画もこちらにはないの。これでも時間がもったいなくて。わたくしが貴方に問うのはただ一つ。そこを通すのか。通さないのか」

「無理強いを……」

妖夢はそう呆れたように一言こぼして、ため息を吐いた。どうしてこうも、白玉楼にふらりと現れる初対面の存在とは会話が成り立たないのか。

主の幽々子にも日々剣術を教えているものの、よく『もつとわかりやすく教えてくれないかしら』と返されるのも珍しくない。自分は思っている以上に口下手なのかもしれないと、妖夢は思った。

とは言え、今回は落ち着いた対応をしたはずだ。それでも尚女が無茶を通してくるというのなら……あの女はやはり、賊でしかない。

白玉楼に住む存在の一人として不穏のものを無視することなどありえないのだ。

「良いでしょう。どうしても通りたいというのなら考えがあります。この『幻想郷』のルール、貴方もご存知でしょうか？ 私の相手をしてもらいますか、『決闘』の」

——負ける気なんてさらさら無いですけどね。私、強いですから。

『幻想郷』の『決闘』。弾幕ごっことも言える。嘗ての『幻想郷』で人用の間にあつた争いを模した戦いにより、互いに自らの力を使って競い合うこと。勝者は敗者の要求を聞き入れ、それは時に無茶なことであっても飲まなければならぬ取り決め。それがこの世界の……『決闘』のルールだ。

「私は魂魄妖夢。この白玉楼の庭師です。そして、私とともに貴女の相手をするのが——」

妖夢はそう言い終わった後で背中に挿してある二刀を抜いて、構えた。威嚇を込めた動作だった。

「——妖怪の鍛えしこの二剣、黒楼観剣、そして、白楼剣。どうしてもここを通りたくば、これらの剣の相手をしていただきましょうか」

妖夢の小柄な体躯に並ぶ、長い刀身が朝日を受けて煌めいた。無窮の切れ味を誇るその刀は妖夢の相棒であり、祖父から託された無二の武器だ。腰に挿している方のもう一振り、白楼剣の方も手入れは行き届いている。できれば、誰これ構わず相手に向けて抜きたくはないのだが、これで怖気づいてくれれば妖夢としても手間がかからずにすむ。

ときには物好きな人間や妖怪が、限界との境目にある幽冥結果を超えてこんなところに来てくるともあるのだ。妖夢の対応はそれらに対するものと同じだ。

「怖気づいたのなら帰ってください。お怪我をしたくなければ、出直すことを勧めます」

「大丈夫、大丈夫。不老長寿、頭脳明晰、金剛不壊。仙人のわたくしであるならば、半霊の持つ剣を凌ぐこと、容易きものです」

「仙人？ 仙人というと、里に出没する茨歌仙さんと同じ……」

「はい。わたくし、生死を超えたものにございますわ。……貴方と同じ、ね」

「……知ったような口を。半霊だって死にますよ。勉強不足ですね」

妖夢は人間の里で時々見かける妖怪の名を出して仙人についての知識を思い出す。

「幻想郷」における仙人とされる妖怪は、そう数が多くなかったはずだ。今日に至るまで、幻想郷の各地で起きる異変の度に、新しい妖怪が外の世界から流れ着いていると噂で聞いたことはあるが……彼女もその一人なのだろうか？

「申し遅れました。神霊廟から参りました、わたくしの名は霍青娥。親しみを込めて青娥嬢嬢とでもお呼びくださいな。この度は白玉楼の主、西行寺幽々子さんに用事があつてまいりましたわ」

「神霊廟……？ 夢殿大祀廟の、あの道場のことですか？」

妖夢はその名を聞いてある異変のことを思い出した。数ヶ月前に、人間の里、付近にできた、命蓮寺という寺の近くで霊の急激な増減が起きたという異変だ。

その異変は『神霊異変』と、里で名付けられ、異変に向かった博麗霊夢たちから妖夢は顛末を聞いている。

妖夢は神霊異変に赴いていない。

妖夢は異変調査として白玉楼に乗り込んだ、博麗霊夢、霧雨魔理沙、東風谷早苗を相手に幽々と共に戦い、『決闘』である弾幕ごっこに敗北したのだ。幽々子をかばって傷を負った妖夢は異変を三人に託し、その解決まで白玉楼で過ごしていた。故に、夢殿大祀廟の住人についてはほとんど知識がなかった。

妖夢を一行に引き入れるつもりだった霊夢達は、代わりに早苗が拾ったという人間を同行さ

せて連れ回したと聞いている。半年前ぐらいに、[〃]幻想郷[〃]の外の世界から、妖怪の山に迷い込んだ少年らしい。

霊力も持てない人間に異変がどうこうできると思えないが、無事解決したということは霊夢たちにとって問題がなかったのだろう。自分がいなくても異変を解決されたことに少しばかりの疎外感を覚えたが、もう終わったことなので気に留めないようにしている。

[〃]夢殿大祀廟[〃]は、神霊異変を起こした者たちの棲む建築物の名だ。

元々は命蓮寺の近くの墓地にある洞窟の底に、[〃]夢殿大祀廟[〃]と呼ばれる建物が存在し、異変の後にその建物の住人達は仙界と呼ばれる異空間に移ったという。

現在の[〃]夢殿大祀廟[〃]では、敷地の一角を道場として開放し、時折里の人間を招いては道教とよばれる教えを広めていると聞いている。その道場の名称が『神霊廟』だ。

妖夢は宗教に対して、あまり熱心な考えは持っていないが、里近くに異変をもたらした集団に対しての情報を仕入れていたことから、青娥の名乗りに対し思い浮かんだ事を問い返したのだ。すると、彼女は微笑みで妖夢に応えた。否定しないということは、違いならしい。

その曰く付きの住人の一人が、何故ここに？

いよいよもって妖夢の疑いは強くなる。ここは簡単に通してはならないと、妖夢の直感が警鐘を鳴らしていた。道教の押し売りということはないだろうが、面倒事はいえる。

「私は言いましたよ？」

さらには、妖夢は口にしたことを簡単に曲げるほど柔軟さを持つ少女ではない。

「出直さないとしたら、私の相手をしてもらいます。刀を抜いた以上、まさかこの刃から避けて白玉楼に侵入できるとでも？　もしそうお考えならば、愚かです」

「わたくしも、悠長にしてはられないのです。一太刀だけ、付き合ってください。その結果で納得したら、私を中へ通してくださいさりますか？　勝敗は単純。最初の一撃を受けた方が負けというのはどうでしょう。互いに短い時間で済むお話だと思いますが？」

「大した自信です。その度胸、買いますよ……魂魄妖夢、楼観剣。いざ尋常に……」

妖夢は青娥の提案を了承した上で今一度楼観剣を背中の鞘に収めた。一撃さえ当てれば良いのなら、最速の一閃を繰り出すまで。必殺の居合で、相手の出鼻をくじく算段に出た。

「勝負！」

決闘の開幕を互いに宣言し、妖夢は階段の頂から躍り出て眼下に立つ青娥へと向かった。楼観剣を抜いて空中で真一文字に一振り。真空波の弾幕を相手に撃ち込んで再び鞘に収めた。

瞬く内に間合いが狭まってゆく。重力の落下に加え、霊力飛翔を用いて加速し、風と一体化したような速度で青娥の首筋を指す。

対し、青娥は妖夢を見つめたまま微動だにしない。

その湛えている笑みも崩さず、何かしらの構えも行わない。

何かの畏か？　一瞬妖夢は相手の動きに対しさらなる怪しさを覚えたが、加速した体軀を留

めることはせず、ひたすらに最初の一手を繰り出せるように集中する。

たとえ罨だろうと、罨が自らを襲う前に決着をつけなければいけないだけのこと。

あと少し。もう少し。背中に収まる白楼剣を握る右手に汗が滲む。迫る真空波に対しても青娥は冷静だ。そこで青娥は初めて動きを見せた。だが、妖夢の期待していたものではない。

「芳香を呼ぶまでもありませんわね」

ただ少し、右手で髪を掻き上げただけだった。

——バカにしているのッ？

一瞬怒りが生まれ、その感情のままに妖夢は楼観剣を抜いた。真空波が青娥の立っていた階段に着弾し、土煙が上がる。そこに妖夢が剣を振り下ろした。太刀筋も思い通りだ。だが、その一閃は甲高い金属音によって阻まれる。

「な……っ」

「未熟ですね。感情が動きに乗っていますわ」

青娥の右手にはいつの間にか細い針のようなものが握られていた。それで楼観剣の刀身を止めてみせたのだ、いとも容易く。弾幕も当たっていないのか傷が見受けられない。

——どこからそんな道具を！？

妖夢はそう思い、ハッとなってすぐに気づいた。青娥の髪が解かれているのだ。

よく見ればその得物は、直前まで髪に差していたかんざしだ。

鏢すら無い細い得物で正確に楼観剣に対し針をあてがい、受け止める……理論の上なら可能だろう。しかし、妖夢の持っている刀は楼観剣なのだ。

切れない物など殆どないと自負する業物なのだ。

なぜ、かんざし程度で自分の剣を止められる……？

妖夢がそう逡巡している間に、青娥は左手で妖夢の右手を掴み、思い切り振り回した。ものすごい力だった。

「うわっ！」

恐らくは噂に聞く仙術とやらか。茨華仙も幾つかの仙術を持ち、その中には体力の強化もあると聞いたことがある。この青娥も同じ技を使ったのだろうか。

妖夢は為す術もなく階段横の木々が茂る坂に投げ飛ばされ、転がった。精一杯の矜持として楼観剣を手放せずに済んだが、この勝負、自分が負けてしまった現実を齒がゆく思った。

——私が、負けた？ いや、それより……

しかし妖夢はすぐに己の負けより、相手の使ってきた得物に興味が湧いた。

仙術はともかくして、かんざしで刀が止められては魂魄家の名折れだ。

「く……その、かんざしは、一体？」

青娥は妖夢の問いに一瞬だけ目を丸くして、親切に応えた。

「ああ、これですか？ ホントはこれ、かんざしではなくて鑿ウツですの。我が秘宝の、ね。これ

を手にしてはいる限り、私を阻むものなどそうそう在りはしません。なにせ、どんなに硬い壁でも物でも、容易く下すことが出来ますのよ？」

やはり、ただの髪飾りではない。その事実には安堵した。でなければ一生モノの恥を背負っている最中だっただろう。

「しかし意外。その気になれば貴方の剣を斬ることも出来たと思いましたが……なかなかどうして。この獲物をもつてしても、その楼観剣とやらを流石に折ることは叶いませんでしたわ」
——楼観剣でなければ、私の刀は折られていた……？

彼女は私の誇りを初めから潰す気でいたのだろうか。妖夢はそう思いながら刀を今一度鞘に戻し、土がついたスカートを軽く払う。

負けは負けだ。言い訳はする気はない。

だが、完全に優位に立ったことを示す、余裕を秘めた相手の物言いが妖夢の心を抉る。その結果として妖夢の可憐な顔に、僅かに不機嫌の色がにじみ出ていた。

「さあ、お約束どおり私の勝ちですわ。ここを通していただけますか、お嬢さん？ 可能であれば、案内もしていただけると助かります」

「二言はありません。青娥さん……でしたね。約束には従います」

不承不承ながら妖夢はそう言い、小さくため息を吐いた後で青娥の元へと歩み寄る。

青娥は「青娥娘娘とは呼んでくださらないのですね」とおどけた様子でそう言うが、妖夢に

できる精一杯の反抗がそれだった。

とんだ朝になってしまった。祖父が白玉楼にいれば雷が落ちても仕方がない。

妖夢は不機嫌な顔を隠さないまま、青娥を正門に、そして白玉楼の玄関へと通した。

「あら、約束もない客を妖夢が通すなんて珍しいわね。どういう風の吹き回し？」

「面目ありません。この方を賊かと思い、刀を握りましたが……この妖夢、不覚を取ってしまいました」

白玉楼の主、西行寺幽々子を前にして妖夢はわずかに視線を沈ませたまま淡々と告げた。

妖夢は情けないとは思いつつも、気恥ずかしさを感じることはなかった。相手の提案に乗ったとは言え、全力を出した上で負けてしまったのだ。

しかし、現実の理解はできても納得ができない。「けわしい顔ねえ」と幽々子から指摘されて顔を赤くしてしまうが、勘弁してほしい、と心から願った。

この顔を不在の祖父に見られることが無いのが唯一の幸運だ。祖父なら一瞬で自分の顔を見て、『決闘』の行方を察するだろう。そうなれば大目玉だ。

「この度、神霊廟より参りました。仙人、霍青娥と申します。西行寺幽々子さん、以後お見知りおきを」

「あら、命蓮寺裏の墓地近くの？ あそこからの客人とは珍しいわ」

「幽々子様も、神靈廟について知っていますのですか？」

「あらあら、妖夢。これでも私、年中白玉楼でもっている訳じゃないわ。以前、夜中に人間の里近くを散歩した時に知ったのよ。……たしかちよつと前に、霊夢たちが向かった場所よね。男の子連れて」

「はい、幽々子さん。先日の際には少々色んな出来事がございましたが……今は何事もなく、幻想郷で日々を送らせていただいておりますわ」

ふと妖夢は両者の喋り方が似ていると思った。

幽々子も青娥と同じように柔らかい喋り方をする人物だ。しかし、この青娥から感じられるものとは違って幽々子の表情に含みは感じられない。だが、青娥は何かがおかしい。

うまく言葉に表せない、彼女から感じる嫌な予感が妖夢を緊張させた。

「存じ上げているようで、光栄です。新参者のわたくしたちといたしましては、この世界の先輩方に存在を知っていただけと言っただけで嬉しい限りですわ」

「お世辞は慣れているわよ。……それよりも、青娥。貴方は用があつてここに来たのでしょうか？ 何もこんな辺境の地に来てまでウチの庭師の遊び相手に興じたなんて冗談、言わないわよね」

妖夢は幽々子からも違和感を覚えた。

幽々子の言葉には棘がある。

青娥の放つ言葉次第で、今度は幽々子と青娥が『決闘』を行う羽目となるだろう。